

11 八条院町

はちじょういんのちよう

知る

■八条院町ってどんな町？

八条院町とは、鎌倉時代後期から室町時代にかけて現京都駅一带にあった町です。平安後期に造られた八条院暁子内親王（一一三七～一二一一）の御所跡にできたことからこう呼ばれました。

建暦元（一二一一）年、八条院が没するとすぐに、御所や周囲の院庁・御倉は荒廃し、東洞院大路（ひがしのどういんおおぢ）に面する築垣を撤去して民家が建ち並び、築垣の中には畑もつくられました。このようにして町が形成されたのです。

正和二（一一三三）年八条院領を伝領していた後宇多法皇は、八条院御所跡を中心とする院町十三か所を東寺に寄進しました。ここに東寺領八条院町が成立しました。

院町は東寺の支配下に入りましたが、公家久我家領をはじめ領地が錯綜して相論が絶えませんでした。東寺の支配下におかれた院町では、年貢徴収など在地支配に直接あつたのは散所（さんしょ）とよばれた隷属民でした。

院町が広がる一带は、平安末期頃から武器などの店があつた商業地でもありました。住人には、番匠（ばんしやう）・塗師（ぬし）・檜皮屋（ひわだや）・紺屋（こんや）などの商工業に携わる人々が多かつたようです。

院町は、応仁・文明の乱（一四六七～七七）を機に農村化していきました。近世には葛野郡東塩小路村（かどのくんひがしおじろむら）となり、主に京都で消費される野菜をつくる農地が広がっていました。

■八条院ってどんな人？

八条院暁子内親王は保延二（一一三三）年四月八日、鳥羽天皇と皇后藤原得子（美福門院）との間に生まれ、釈迦と同日の誕生として祝福を受けました。鳥羽上皇の寵愛をうけ、同母弟近衛天皇の没後、女帝に推されましたが実現しませんでした。応保元（一一六一）年、二条天皇の准母として院号が下され八条院と称しました。

異母兄の後白河天皇は、美福門院が養育した二条天皇が即位するまでの中継ぎ・傍流的な立場でした。これに対して八条院は、鳥羽・美福門院系の皇統として莫大な経済基盤を有し、独自の政治勢力の拠点となりました。

八条院御所の周辺には、摂政九条兼実の子良輔や、平氏政権中枢と対立した平頼盛（たいらのよりもり）などをはじめとする鳥羽・美福門院ゆかりの近臣貴族が集住していました。また、治承・寿永の乱（一一八〇～八五）の口火を切った以仁王の皇子女も八条院の猶子として八条院御所で生活していました。

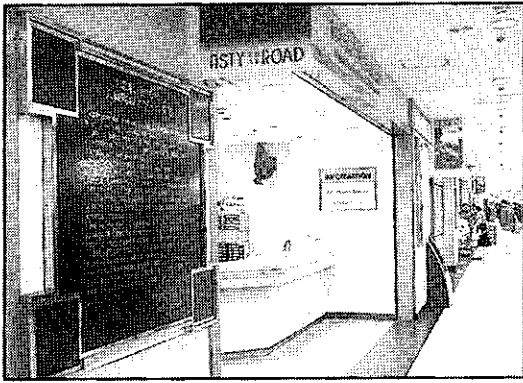
八条院に仕えた女房の記録によると、八条院は温厚な人柄で、女房や貴族・侍たちは気ままに奉仕していたといえます。

歩く／見る

■八条院町跡の発掘 下京区東塩小路町・東塩小路釜殿町・東塩小路高倉町（JR京都駅一帯）

八条院町があった場所は、今日の京都駅一帯に相当します。平成六（一九九四）年京都駅ビル改築時の発掘調査で、鎌倉時代の刀装具の鋳型や、室町時代の銭の鋳型など鋳造関係遺構が発見されました。これらの遺構は中世京都きつての職人・商人の町だった八条院町の繁栄をうかがわせます。

その後の調査では、建物の柱穴・井戸・ゴミ捨て場や土師器などが確認されました。なかでも注目されたのは二百点もの、鎌倉時代から室町時代にかけて作られた漆器類です。その約半数は完全な形で発見され、底に松の葉を敷き、その上



「京都駅 昔むかし 八条院および八条第跡」の解説プレート。平成6年(財)古代学協会・古代学研究所が掲げた。京都駅八条口観光案内所前。

に漆器と大量の箸・土師器が埋納されていました。日常に使用した痕跡がなかったため、祭りなどに使用されたものと想像されます。

漆器は中世になると量産が可能になり、安価な品が出回るようになりました。院町跡から発見された

これらの漆器も京都の民衆が使用していたものと考えられます。

■蓮華心院跡 右京区常盤古御所町

仁和寺院家の一。双ヶ岡南西麓にあった八条院御所常盤殿が寺に改められたもの。承安四（一一七四）年守覚法親王を導師として落慶供養されました。建暦元（一一二二）年六月二十五日、八条院はこの地において七十五歳で没しました。

■暲子内親王墓 右京区鳴滝中道町

八条院は蓮華心院で亡くなると、院内に墓が営まれ、翌年六月には墳墓上に宝塔一基が建立供養されました。墓は蓮華心院北西、御室川（鳴滝川）右岸に面する小墳（現在地）に近年比定されました。